

オリンピック・
パラリンピック
こども新聞

2021年（令和3年）
12月25日 第12号

各面の内容

2,3,4,5
こども記者のイチ押し選手
母校の文京一中を訪れたウルフ・アロン選手

オリンピック・パラリンピックこども新聞は、こどもたちが記者になって取材や写真撮影に取り組み、みなさまにおどける新聞です。

歩けなくても前向き
イリアナ・ロドリゲスさんは、パラリンピック難民選手団の団長をつとめています。「笑顔がすてきな」という印象を持ちました。イリアナさんは歩けなくなったときは、「自分の人生はどうなってしまうんだろう」と不安になったそうです。でも、「また生活できる。泳げる」と分かったら、前向きになれたそうです。イリアナさんの言葉から、「難民選手団のみなさんは、世界の難民に希望の光を届けたいと思っているんだろうな」と、深く感じました。
（小4/ちさと）

ポジティブに考え
イリアナ・ロドリゲス団長に気分てんかんに何をするか質問しました。ポジティブなことを考えるだけで気分てんかんできるそうです。ぼくは本を読んだりして気分てんかんします。
（小4/稲葉有展）

パラリンピック難民選手団と交流

9月3日、オンラインでパラリンピック難民選手団との交流会に参加し、イリアナ・ロドリゲス団長に話を聞きました。
（関連記事6面）

戦争などで国に住めなくなった難民は、世界に8000万人もいて、9年前から2倍になったそうです。難民で、障害があるのにスポーツをがんばって、パラリンピックに出た人たちが

励まし合って
いることも知りました。元の国や言葉、習慣など、違う人たちで、金メダルをとっても、流れる国歌はありません。難民キャンプでは、言葉や習慣が違う人たちが親しくなれるようにスポーツに取り組んでいます。難民選手団の選手も、お互い励まし合っていたそうです。僕たちも、国などが違って助け合えたら良いと思いました。
（小4/大堀立真）

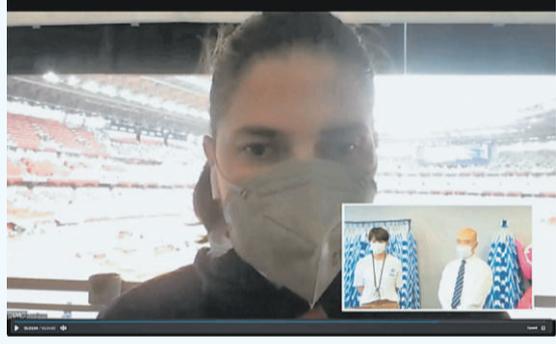
心に残ったことは、難民選手団がパラリンピックに出場するのは、今大会で2回目だということです。リオ大会で初めて結成され、東京大会では6人が出場しました。難民選手団からは「努力」という言葉をよく聞きました。難民で障害があるのに、パラリンピックに出るのはいくらもすごいことです。その裏では、人一倍努力していると思います。選手のみなさんはみんなに希望や勇気を伝えたいそうです。僕には伝わってきませんでした。決して努力は裏切らないと思いました。
（小4/垣本律紀）

夢舞台困難と戦う
シリアやアフガニスタンでは100人に1人が難民だそうです。難民選手の皆さんは夢の舞台で困難に立ち向かう姿を通して、祖国に希望と勇気を与える存在になれば、と思っているそうです。
（小5/豊島悠太）

勇気と希望 届けたい



8月23日の記者会見に出席した難民選手団の4人は、文京区の小学生が折った青い紙ひこうきなどに喜んでいました。右からアリア・イッサ選手、中央奥シャハラッド・ナザジール選手、中央手前イリアナ・ロドリゲス団長、左イブラヒム・フセイン選手
©アフロススポーツ



難民選手団との交流会でインタビュに
応じるイリアナ・ロドリゲス団長

苦しみわかった
パラリンピックの難民選手は、オリンピック選手やパラリンピック選手とは違う努力もしていることを知りました。難民選手のような困難のない僕が幸せな環境にいることに気が付きました。だから今後は、できる限りの努力をし、いろいろなことを乗り越えていきたいです。また今回の取材で、難民選手のことを知り、難民の人の苦しみや大変さが分かりました。これからは、僕も難民選手のお手伝いが、少しでもできればいいなと思いました。
（小6/タクト）

二つの意味戦う
難民の中で、受け入れてくれた国で自分の力を生かして活躍している人もいます。とても印象に残りました。難民の人々について詳しく知ることができ、協力したいと思いました。難民選手団は二つの意味で戦っているのだと思います。
（小5/根本梨咲）

